

子宮頸がんは“マザーキラー”

世界では、年間約60万人の女性が子宮頸がんにかかり約34万人が死亡しています。日本では、年間約1万人の女性が発症し約3,000人が死亡しています。出産する世代（20-30代）や未成年の子を持つ世代（40-50代）がかかる癌であることから、“マザーキラー（お母さん殺し）”と呼ばれています。30歳代までにがんの発症や治療で子宮を失い妊娠できなくなる人も1年間に約1,000人います。



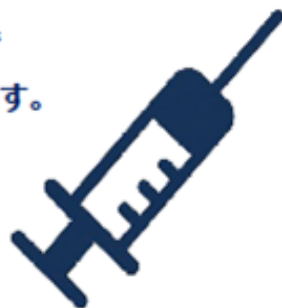
原因は“感染症（HPVの感染）”



子宮頸がんは、そのほとんどがヒトパピローマウイルス（Human papillomavirus : HPV）が子宮の頸部（入り口）に感染することで発症します。多くの女性が一生に一度はHPVに感染するといわれています。HPVには200種類以上のタイプ（遺伝子型）があり、子宮頸がんの原因となるタイプが少なくとも15種類あることがわかっています。HPVに感染してもすぐにがんになるわけではなく、いくつかの段階を経て発症します。

予防には“ワクチン接種”が有効です

HPVワクチン（従来「子宮頸がんワクチン」とも呼ばれていました）を接種することでHPV感染を防ぐことができ、結果として子宮頸がんの80～90%を予防できるとされます。初感染より前にワクチン接種を済ませることが重要であることから、性交渉前の年齢（小学校6年生～高校1年生）の女性が公費接種の対象となっています。ワクチン接種と定期的な検診により、子宮頸がんによる死亡はほぼ100%防ぐことができます。



沖縄県の現状を知って下さい！

沖縄県は、子宮頸がんの罹患率や死亡率が全国平均を上回っており、特にAYA世代（思春期から若年成人世代）で顕著です。また、HPVワクチンの接種率は全国平均を大きく下回るどころか「ダントツで最下位」となっています。先進国の中でも日本は「ワクチン後進国」と揶揄されていますが、その中でも接種率が極端に低い沖縄県は先進国の中でもワクチン接種が最も遅れている地域ということになります。

ワクチンは間隔を開けて3回の接種が必要です！今年度16歳になる方は、9月中に1回目の接種を開始しないと公費（無料）での全回接種が間に合わなくなります！